

第3章 14世紀および15世紀

(仮訳)

“And in the gardin at the sonne uprist	そして庭では太陽が昇る時
She walketh up and down wher as hire list	彼女は上へ下へと気の向くままに歩き
She gathereth flouers, party whyte and reede	彼女は花を摘む、白や赤を取り交せて
To make a sotil gerland for hier heede”	自分の頭を飾る素敵な花の冠を作るため

Chaucer, Knight's Tale チョーサー 騎士物語

イングランドでは14世紀後半から15世紀初めにかけて大きな変化が起きていた。貿易と産業が発達し、同様に園芸が復活した。ノルマン征服以降の年月の間に、征服者と被征服者が一つの国として融合したが、それは平和裏に進んだものではなかった。しかしながら、今、私たちは戦争が海外で戦われる時代を迎え、国内は比較的平和な時代を謳歌しているのである。国内はと言うと、社会の貧しい階層の人々が領主に対して権利を段々と主張してきていた。領主に対し労役あるいは現物で年貢をいくらか納めるだけで、農地を耕す農民という、一つの階級が生まれつつあった。これらの小さな農家と荘園の周りに庭や果樹園が造られ、ここから、このような動きがガーデニングの進歩にどのように影響を与えたかを見ることができる。

当時の文献を見ていると、貧しい人々は主として野菜を食べて生きていたような様子に出くわすことがあり、次のラングランド Langland [1330?~1400年? 詩人] からの引用がその例として挙げられる。

(仮訳)

“Alle the pore peple pesecoddes fetten (*fetch)	貧しい人々はみな豆のさや pesecoddes を取ってきて
Benes and baken apples thei brouȝte in her lappes	豆と焼いたリンゴをスカートの折り返しに入れて
	運んできて
Chilbolles and cheruelles and ripe chiries manye”	ネギとチャービルとたくさんの熟れたサクランボ
(† <i>Piers Ploughman</i>)	(† 農夫ピアズ)

[訳注 : pescoddes とは何かは明確にはわかっていない。果物かも知れないが、[原書第2版第3章「ロンドンの文無し」の引用がある] 51ページの「熱い pescodes」という字句から見ると疑わしい。オックスフォード英語辞典 OED ではエンドウ豆などのさや、の意味で“ peasecods ”または“ peascods ”の変異形とされている。

(Medieval Forum : George W. Tuma 名誉教授編、サンフランシスコ州立大学英語学部)

さらに続けて、貧しい人々は

“With grene poret and pesen to poysonn hunger	緑のネギと豆でもって飢えを紛らわそうとした
---	-----------------------

thei thought” († *Ibid.*)

(† 同書)

また “Two loves of benes and bran

2つ好きなもの、豆とふすま [麦かす]

Y baked for my children”

私の子どもたちのために焼いてくれた

(* *Piers Ploughman*)

(* 農夫ピアズ)

我慢強いグリゼルダ Griseldis [おとなしく忍耐強いことで知られる中世ヨーロッパの物語中のヒロイン] の極貧状態を描くにあたって、チョーサー Geoffrey Chaucer [1340 頃 ~ 1400 年 イングランドの詩人] は、食べ物野菜しかないのに庭を持っていない彼女は道端の草に頼らざるを得なかったという事実を強調している。

(仮訳)

“Whan she homward cam she wolde bringe

家に帰る途中いつも、彼女は持ち帰るのだろう

Wortes or othere herbes tyme oft

根っことかその他のハーブを しばしば

The which she shredde and seeth for her livinge”

それを刻んで茹でる、自分の食べ物として

(† *Clerk's Tale*)

(† 学僧物語)

[訳注] When she came homeward she would bring with her

Some roots or other herbs often as not,

Which she shred and boil for provender

出典 : Oxford World Classics

この時代の始まりは大いなる災厄の時代であり、戦争より悪い災難、黒死病として知られる恐ろしい疫病が国を覆い尽くした。当時の恐怖と生き残った者の苦しみに追い討ちをかけるように、凶作が続く多くの収穫が失われた。そしてわずかな収穫さえも労働力がほとんどなかったので穫り入れるとができなかった。多くの果樹園と庭が何年もの間、放置されひどい状態になったのは疑いようもなかった。ただ、それにもかかわらず、それらの数は増加しつつあり、14 世紀末には、どの小さな荘園および農家にも庭が誇らしげに見られた。なぜなら「国内では、果物とコーンが十分なだけ穫れて、人々が平和に暮らす限りは十分ゆとりがあったからだ。」“that londe bereth fruyt & corn good ynoughe, that londe is well at ease as longe as men lyue in peas.” † 確かにこれはそのとおりで、人々が比較的平和に暮していれば、ガーデニングと農業が復活したからだ。この発展はまたもやバラ戦争 [1455~1485 年] で足止めを食らうことになり、前進のための次の一步はチューダー朝になって平和が回復するまで待たなければならなかった。

† Trevisa が翻訳した Higden による *Polychronicon* における英国の描写, 1387 年頃 (printed by Caxton, 1482 年)

中世においては、今私たちがキッチンガーデン [菜園] とでも呼ぶものが、ほとんどの場合、家に付属して造られた唯一つの庭であった。美しさや楽しみのためだけの庭という考

え方は、ほんの二次的な位置づけしかなかった。初期の料理本を見ると、野菜の料理用の様々なレシピが書かれているが、野菜だけが料理された品というのはほんの少ししか載っていない。しかし、お金持ちにとってみれば、彼らはこれらの多くのレシピに必要な食材すべてを揃えることができ、そして、たくさんの肉と、もの凄い種類の獲物、鶴、アオサギ、ダイシャクシギ、その他の鳥を、現在もなお使われている鳥のほかにも使ったので、別皿で出される野菜のことなど、量がどうであろうと、断食の時以外は、気にも留めなかった。庭の主な役目は詰め物と香り付けのためのハーブを作ることであり、ハーブは好きなだけ使えた。たとえば、ある本(**Harl* 写本 4016、1450 年頃 Printed Early Eng. Text Soc. Ed. by T. Austin) の最初のレシピは「野兎のハーブ」料理である。まず「colys を用意し、それを茎からきれいにそぎ落とし、次に Betus とルリヂシャ Borage、ダイコンソウ auence、スミレ、Malvis、パセリ parsele、カッコウチヨロギ betayr[betony シソ科イヌゴマ属] patience、ネギの白いところ、イラクサの実を用意する；半茹でにし、水分を絞り出し、小さく刻む。そして食卓へ出す」などなどとなっている。タマネギ、ネギ、ニンニクは幅広く使われた。肉または魚を、梨またはリンゴ、香辛料・砂糖と合わせて調理し、それにネギを細かくすり潰したものの、細かく刻んだポレット porrettes [ネギ green onions, scallions & young leeks] 丸ごとのタマネギかニンニクのソースを加えた料理はまったく珍しいものではなかった。チョーサーの「カンタベリー巡礼者」の一人である召喚人のような階層の人々の間では、この味が広く好まれていた。

「我々はガーリックオニオン、そしてネギも好物であった」(仮訳)

“We lovede he garleek oynouns, and ek leeks.”

すべての強い香りのハーブは料理の時に人気であり、どの庭にも各種十分に取り揃えられていた。フェネルは一般によく使われたハーブの一つであり、緑の葉っぱ、そして種も食用とされた。重さ 8 ポンド半のフェネルの種が国王の家では一月分として買われた(†*Wardrobe Acc.* エドワード 1 世 1281 年)。また貧しい家では空腹の苦しみを紛らわせるために食べられたり、断食の日のまずい食事にちょっとした楽しみを得るために食べられた。『農夫ピアズ』には、聖職者が貧しい女に尋ねる場面がある。

(仮訳)

“Hast thou ought in thy purs ?” quad he, 「お前は袋の中に何か持っているか」と彼が言う

“Any hote spices ?” 「辛いスパイスとか？」

“I have pepper and piones (‡ peonies),” quad she, 「胡椒とシャクヤク」と彼女は答え、

“and a pounce garlike, 「それとニンニク 1 ポンド、

A ferthyngworth of fenel seed, for fastyng days.” 断食の日用のフェネルの種 4 分の 1 ペニー分」

古い医学の写本の一つには、この植物のことが書かれている。(§ 14 世紀写本、ストックホルム王立図書館所蔵、*Archæologia* 第 30 巻より引用)

(仮訳)

“Fenel is erbe precyows, * * *	フェネルは貴重なハーブである
Good in his sed so is his rote And to many thyngys bote (good).” * * *	種としてよし根としてよし そして多くの役に立つものとして
Fenel in potage <i>and</i> in mete Is good to done whane yu schalt ete All grene loke it be corwyn (*=carved= cut-up) small In what mete yu vsyn schall.”	スープの中そして食物の中のフェネルは 好ましいもの、あなたが食事をする時に 全体が緑色で小さく刻まれていても どのような食べ物であってもあなたが見るものは

ミント Mint はフェネルとともにソースとしてよく使われた。チャーサーは両者が一緒に栽培されている様子について述べている。

(仮訳)

“Then went I forth on my right hond Downe by a litel path I fond Of Mintes full and Fennell greene.” - <i>Romaunt of the Rose</i>	そして私は右手に進み 下の方の小さな道のわきに私は見つける いっぱいミントと緑のフェネルを - バラ物語
--	---

パセリ Parsley はこれらのいずれよりもさらに一般的であったかもしれない。最も初期のイギリス式ガーデニング English gardening の論文 († 写本、ケンブリッジ大学トリニティカレッジ、*Archæologia* 中に所収、1894 年) にも短い詩の一節がパセリについて割かれており、その育て方に関する説明が実に的を射ているのである。

(仮訳)

“Percell kynde ys for to be To be sow yn <i>the</i> monthe of mars so mote y the He will grow long and thykke And euer as he growyth thu schalt hym kytte <i>Thu</i> may hym kytte by reson’ <i>Thryes</i> yn one seson’ Wurtys to make and sewes (‡ sauces) also. Let hym neuer to hye go To lete hym grow to hye hit is grete foly. * * *	パセリの類はこのようにすべし 種蒔きは 3 月に そうすればうまく成長する 大きく豊かに育つであろう そして十分成長すれば摘み取ることになる 様子を見て摘み取ることもあるかもしれない 1 シーズンに 3 回 野菜を作りまたソースも作る 決して高く伸ばしてはいけない 成長するままに高く伸ばすことは大きな間違い
---	--

Thay *that* the sede schal bere the
Kytte hym nougt but lete hym be.”

種から芽が出たパセリは
摘み取らないでそのままにしておきなさい

同じく実践的な詩人、John Gardener もタマネギ、ニンニク、ネギの植え時について指示している。これらは聖バレンタインデーに種を蒔くが、それは「弱くないハーブ」“herbys vn-meke”、すなわち「耐寒性」「hardy」と呼ばれる種類だからだ。種用のタマネギは4月から5月に種を蒔き、背が伸び始めたらセイヨウトネリコの棒で支えてやる。

(仮訳)

“Forkys y made of asche-tre	セイヨウトネリコの木で作った2股の支柱
That none of hem downe nougt fall	どの1本も倒れることがないとは言えない
* * *	
When they rype they wyl schow	収穫時期になればそうとわかる
And by the bollys thu schalt hem know	bollysによりあなたはそれを知ることになる
The sede wt[ith]yn wul schewe blake	中にある種は黒くなるだろう
Then thu schalt hem vp take	そうしたらあなたはそれらを拾い上げる
They wul be rype at the full	種は完全に熟しているであろう
At lammasse of Peter Apostull.”	聖ペテロの収穫祭の時には

サフラン Saffron は驚くほど大量に料理で使われ、それに支払われた金額も大変大きく、1ポンドあたり10から20シリングに上った。サフランは主に東部地域で育てられ、ノーフォークのウォールシンガム Walsingham は昔はその産地として有名であった。エセックスのサフラン・ウォールデン Saffron Walden の町の名はこれにちなむ。サフランの苗床には十分な注意が払われなければならない。ジョン・ガードナーが言うところでは、「苗床は dyng を使って上手に作られなければならない、それは本当にもし成功を望むなら」“Beddys” must be “y-made wel wyth dyng, For sothe yf thay schal bere.”。そして続けて彼は、球根は穴掘り具 dybbyl によって位置を決め、3インチの深さに植えられなければならないと言う。

(仮訳)

“Thay wold be sette yn the moneth of September	それらは9月中に植えられることになろう
Three days by-fore seynt mary day natyuyte.”	セントメアリーの日の3日前までに

庭に植えるその他のハーブの中で、キャベツ、すなわちケール kale は主要な場所を占めていた。これらは“caboges”、“cabochis”、“caul”あるいは“kole-plantes”と呼ばれたり、“wurtes”または“wortes”がキャベツを意味することもあった(* “Brassica . . . wortes aut cole aut colewortes.” - Turner’s *Libellus*, 1538年)。ジョン・ガードナーは“wortys”をその意味で使った。

(仮訳)

“How he schall hys sedys sowe	どのようにして彼は種を蒔いたらよいのだろうか
Of euery moneth he most knowe	毎月について彼はよく知っている
Bothe of wortys and of leke	キャベツとネギの両方について
Owynys and of garleke	タマネギとニンニクのこと
Percely clarey and eke sage	パセリ、クレアリー [オニサルビア] 加えてセージ
And all other herbage.”	そしてその他すべての葉物野菜について

彼は“wortys”の栽培について 1 段落 25 行を使って書いている。注意深く種を蒔いていけば 1 年中いつでもキャベツは収穫できるだろうと言う。

(仮訳)

“Euery moneth hath his name	各月にはそれぞれの名前がある
To set and sow without any blame	間違いないよう日を決め種を蒔く
May for somer ys al the best	夏は 5 月が何といても一番
July for eruyt (†=harvest) ys the nexst	収穫には 7 月が 2 番目
November’ for wynter mote the thyrde be	冬は 11 月が 3 番目かも知れない
Mars for lent so mote y the (‡=so may I thrive)	四旬節は 3 月、そうすればうまく成長する
* * *	
And so fro moneth to moneth	そして月から月には
Thu schalt bring ‘thy wurtys for the.”	あなたは「自分のキャベツを成長のため」持ってくる

15 世紀の料理本を見ると、キャベツのレシピは 2 つあり、一つはスープ“potage”、もう一つは骨髓 marrow、薄いお粥 gruel、サフランと一緒に料理したものであった。現存する大きな宴会のリストの中には、そのような野菜料理は、あったとしても稀にしか作られなかった。ヘンリー 4 世 [在位 1399 ~ 1413 年] の結婚式の披露宴の 3 番目のコースには、pescodde [前出：豆のさや] とイチゴが料理の一つとして出されたが、これは当時の食卓にあってはほとんど唯一の例と言える(* *Two Fifteenth Century Cookery Books*. By T. Austin, E.E. Text Soc.)。キャベツは最も早くからこの国の中で育てられてきたが、次の一文に書かれているものは改良されたものかも知れない(† Isaac D’Israeli, *Curiosities of Literature*)。「ドーセット、ウィンボーン・セントジャイルズのアントニー・アシュレイ卿 Sir Anthony Ashley はわが国で最初にキャベツを植えた人物であり、彼の記念碑の足元にはキャベツが置かれている」。1627 年に遡るそのお墓は、現在、教会に行けば見ることができる。

14 世紀および 15 世紀には、果物の種類は広がり、量的にも十分な供給が行われた。いくつかの新しい種類のリンゴや梨のことが当時の詩人たちによって書かれていることから幅広く知られていたに違いない。リドゲイト Lydgate [1370 ? ~ 1450 年 ? イングランドの宮廷詩人・修道士] は、Pomewater (白リンゴ) ‡、Ricardon、Blaundrelle、Queening というリ

ンゴについて語っている。ガウアーGower[1330?~1408年 イングランドの詩人]は別の種類、苦みのある甘さ the Bitter-sweet について語っている。

(仮訳)

“For all such time of love is lore	愛のそのような時間はいつもつらい
And like unto the bitter-swete	そして苦く甘いまでに
For though it think a man fyrst swete	それは男は最初は優しいと思うが
He shall well felen at laste	最後に行きつく先は間違いなく
That it is sower.” §	素っ気なくなる

Confessio Amantis

恋人の告白

‡シェークスピア 恋の骨折り損 *Love's Labour's Lost* “Ripe as a Pomewater, who hangeth now like a jewel in the ear of *caelo* - the sky, the welkin, the heaven.” (小田島雄志訳：そして、*caelo*、すなわち大空、蒼穹、天空の耳に宝石のようにかけられ、白リンゴのように熟しておりました。第4幕第2場)

§ロメオとジュリエット “Thy wit is a very bitter sweeting, it is a most sharp sauce” (大場健治訳：甘っちょろいくせに苦い冗談だ。薬味が少々きつすぎる。第2幕第4場)

チャーサーの「ミラー物語」の中には、リンゴを貯えておく昔の習慣について思い出させる箇所がある。

(仮訳)

“Hire mouthe was swete as	彼女の口は甘く...
... hord of apples, laid in hay or hethe”	...貯蔵リンゴの如く、それは干草やヒースの中に置かれて

彼は梨の名前を私たちに教えてくれているが、それは明らかに新しく輸入されたもので、同じように描かれている。

(仮訳)

“She was wel more blisful on to see	彼女はこの上なく幸福な様子で見
Than is the newe perjenete tree.”	新しいペアジュネットの木よりも

ウォーデン梨 Wardons は各種料理の中で依然として一番人気が高かった。梨料理のレシピで梨と言えば、それは普通、ウォーデン梨のことであった。たとえば、「梨のシロップ漬け *Peris in Syrippe*。ウォーデン梨を用意し、適当なポットに入れる」とか「梨のコンポスト *Peris in Compost*。ウォーデン梨を用意し、皮を剥く」(∥Harl、写本 4016、E.E. Text Soc.)。ヘンリー4世の結婚披露宴では、この梨のシロップ漬けが二度にわたり出され、それは鹿、うずら、チョウザメ、ノハラツグミなどと同じコースに含まれていた。同じく戴冠式の際の祝宴では、マルメロのコンフィ“comfyte”と、あわせて黄金色のリンゴ“Pomedorreing”、この場合、オレンジのことを意味すると思われるが、それはこのような珍しい果物はこの

日のような重要な行事のために調達されたであろうと思われるからだ。オレンジはおそらくもっと早い時期から機会を見てはこの国に持ち込まれていたと思われる。エドワード1世の第18年に女王が大きなスペイン船の荷物の中から、イチジク1籠、レーズン1籠、ナツメヤシ1包、ザクロ230個、レモン15個、そしてオレンジ7個を買ったと言われている (**Manners and Household Expenses*. Ed. Beriah Botfield Roxburghe Club, 1841年)。

サクランボ Cherries はとても広範囲に栽培されていた。その収穫の季節はラングランドにより「サクランボの季節」と語られた。このサクランボの収穫は夏の盛りにあたり、お祭り騒ぎの時であった。ガウアーは、これを人生の短さと比べている。

(仮訳)

“...endureth but a throw	...ほんのちょっとだけ続く
Right as it were a cherry feast.”	ちょうどサクランボ祭りのように
- <i>Confessio Amantis</i>	- 恋人の告白

そしてリドゲイトもサクランボ祭りを比喻として使っている。

“This world is but a cherry fair.” この世はサクランボ祭りのようだ

サクランボとイチゴはロンドンの街角で売り歩かれ、「熟れたイチゴはいかが」の呼び声はリドゲイトの時代ですら身近なものだった。

(仮訳)

“Then vnto London I dyd me hye	そして私はロンドンへと急いで向かった
Of all the land it beareth the pryse	ロンドンには国すべての宝
‘Hot pescodes’ one began to crye	「熱い pescodes はいかが」と一人が叫び始めた
‘Strabery rype’ and ‘cherryes in the ryse’ (†=branch, twig)	「熟れたイチゴ」と「枝付きサクランボ」
One bade me come nere and by some spyse	こちらへ来てスパイスを買えと私に言う人あり
Pepper and safforne they gan me bede	胡椒とサフランはどうかと私に勧めてくる
But for lack of mony I might not spede.”	だけどお金がなくて買えないだろう
- <i>London Lyckpeny.</i>	- ロンドンの文無し

桃 Peaches はリドゲイトによって「よりありふれた果物」の一つとして触れられていたが、栽培されている品種は質の劣ったものだけだった。

セイヨウカリン Medlars も栽培され、食べる前に貯蔵されているのは、今も見られる流儀である。「代官物語のプロローグ」“*Prologue to the Reeve's Tale*”において、チャーサーはこの慣習に触れ、代官の古い時代について語っている。

(仮訳)

“But if I fare as doth an open-ers (*=a medlar) もし私が進まないなら、セイヨウカリンのように

That ilke fruit is ever lenger the wers その果物はどんどん悪くなり
Til it be roten in mullock or in stre (†=rubbish and straw).” 腐ってゴミや屑になってしまうまで

[訳注：セイヨウカリンは部分的に朽ちた後でないと食べられない。]

『花と葉』 *The Flower and the Leaf* における庭園と樹木に関する描写の中で、満開のセイヨウカリンが「ハーブの側に寄り添って」絵のように美しく描き出されている。

(仮訳)

“And as I stood and cast aside mine eie そして私は立ち止まり視線を横に投げかければ
I was ware of the fairest medlar tree この上なく見事なセイヨウカリンの木に気付いた
That ever yet in all my life I sie それは私の人生の中で今まで見たことのない
As full of blossomes as it might be. あらん限りの満開の花を咲かせ
Therein a goldfish leaping pretile そこに一尾の金魚が跳び込み
Fro bough to bough; and as him list, he eet 枝から枝へ；そして望むように、彼は食べる
Here and there of buds and floures sweet.” そこかしこに甘い香りの蕾と花が

プラム Plums については詩人によっても、また古い会計簿にもあまり書かれていないが、ダムソン damson とブリス bullace [両者とも和名インシチチアスモモ *Prunus insititia*] がこの国で栽培されていたことはわかっている。ただし量的にはそんなに多くはなかったのであろう。『バラ物語』の中でチャーサーは身近な果物について分類をしている。

(仮訳)

“And many homely trees there were そしてそこには身近な木々がたくさんあり
That peaches, coyness (†=quinces), and apples bere 桃、マルメロ、リンゴがなっており
Medlers, ploumes, peres, chesteynis, セイヨウカリン、プラム、梨、栗、
Cheryse, of which many one fayne is, サクランボ、これらの多くのうち一つ嬉しいのは
Notes, alleys and bolas ナッツ、小径とプラム
That for to seen it was solas.” (L. 1373.) それを見るのは幸せ (1373行)

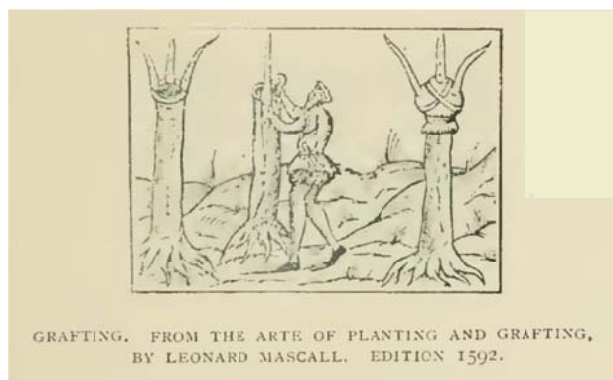
当時の庭師たちは接ぎ木に多大な注意を払った。 梨をサンザシ hawthorn に接ぎ木する手法はごく初期の頃から知られていた。ジョン・ガードナーはリンゴと梨の接ぎ木のための台木は1月に植えることとし、リンゴはリンゴの台木に、梨は「サンザシの上に」と書いている。そして接ぎ木は9月と4月の間のどこかの時期に行わなければならないと言う。

(仮訳)

“Wyth a saw you shall the tree kytte 鋸で木を切って
And with a knife smowth make hytte ナイフで穴を滑らかにして
Klene a-tweyne the stock of the tree 二つにした木の台木をきれいにして

Wherein that your graft shall be	そこに接穂が挿し込まれることになる
Make your Kyttyng of your graft	接穂を切ったものを
By-twyne the new & the old staffe”	新しい物と古い物の間に

台木の上に粘土 clay を被せなければならないが、それは「雨で濡れないようにするため」で、さらに粘土の上に苔を「ハシバミの木の皮で作った紐 wyth」で縛っておく。ガーデニングと農業に関する初期の著作者たちの多くはその論考の相当部分を接ぎ木に割いており、果物の色や香りを変える様々な実験が行われた。15 世紀における接ぎ木の権威であるロバート・サル Salle を引用すると（*Sloane 写本、122）、「もし自分のリンゴを赤くしたいと望むなら、リンゴの木の接穂を持ってきて、ニレまたはハンノキ aldyr の台木に接ぎ木すれば赤いリンゴが獲れるだろう。」「錐 wimble で木に穴を開け、水を使って何色に変えたいか、そしてそれを穴に入れれば、果物の色は同じ色になるであろう」（†同じ方法が Porkington 論文の中でも示されている。この論文は、Halliwell 編により 1855 年、Warton Club のために出版された。）



[図 3 - 1] 接ぎ木 植栽と接ぎ木の技術 レオナード・マスカル 1592 年版

農民教育でもっとも基本的とされたのは、接ぎ木に熟達することで、それは、少し時代は下るが、次のような記述に、実に詳しく描かれている。「農民にとって、必要かつ利益があり、かつ喜びともなるのは、梨、ウォーデン梨、各種のリンゴを栽培することである。加えてサクランボ、ヘーゼルナッツ【ハシバミ】filberdes、いろいろなプラム bulleys, dampsons, plummer、クルミなどもである。したがって、接ぎ木のやり方を学ぶことは有益である」

（ † 農業書 *Book of Husbandry* 1544 年 Fitz Herbert 著。1882 年 Skeat 編 ）

当時の庭園は通常四角く囲われた土地であり、その境界は石、煉瓦、漆喰の壁があるいは分厚い生垣で囲われていた。そこには普通、2つの入口があり、1つは家から開けられるドアであり、もう1つは庭から果樹園、牧草地に行くためのものであった。仮に、これらの背の高い生垣や壁が美観上あるいは目隠とするために後々の時代に至るまで維持されて

きたとするなら、これらが最初に作られた理由は安全上の観点からのものであったことは間違いのないところである。



[図 3 - 2] 庭園の壁に囲まれた芝生の席 バラ物語より フランダース写本
15 世紀後半 B. M. Harl 4425

(仮訳)

“I saw a garden right anoon
Full long and broad and everidele
Enclosed was and walked wele
With hie walles embatailed.”

私は直ちに庭を見た
目一杯に長く広くそして完全に
囲われていて幸せに歩んだ
高い胸壁で守られて

囲いの内側は端から端までよく手入れされきちんとしていた。全体、壁に向かっては土盛りされ、その外側は煉瓦、石で覆われ、その上は甘い香りのハーブが植えられていた。所々に芝生で覆われた席やベンチが置いてある休憩所が設けられ、それは「分厚く敷かれベルベットのように柔らかかった」。庭園の中にはこんもりした低い土の丘がここかしこに造られ、「そこで座ったり休んだりできたし」、これらの「ベンチ」も「新しい芝生で緑に覆われた」。庭園全体をめぐる小径は砂か小石が敷きつめられ、雑草が生えないようにされた。リドゲイトは「すべての散歩道が砂により平らにされている」庭園のことを書いた (**The Chere and the Bird*)、

あずまや、すなわち「自分だけの遊び場」のない庭園はあるべき姿の庭園とは考えられなかった。それは壁の隅や分厚い生垣に守られた庭園の一部に設けられた。あずまや、あるいは“herber”は、蔓性の植物がしっかりと絡みついた木々で作られており、よそ者の目から見られないようにできていた。その一例が『花と葉』*The Flowers and the Leaf*の中でこのように描写されている。

(仮訳)

“And at the last a path of little brede I found, that greatly had not used be, For it forgrowen was with grasse and weede That well-unneth (†=scarcely, hardly) a wighte might it se:	そして幅の狭い小径の最後に 私は見つける、あまり使われてこなかった所を なぜならそこは草や雑草が伸び放題になって ほとんど人影も見られることもない
Thought I, this path some whidar goth, parde, And so I followed, till it me brought To right a pleasaunt herber well y wrought.”	私は思った、この径はどこかへ行く、必ず だから私は進んだ、その径が行き着く所まで まさに心地よい、丁寧に作られたあずまやへと
That benched was and with turfes new Freshly turved, whereof the grene gras, So small, so thicke, so short, so fresh of hew,	ベンチは新しい芝生で覆われて 瑞々しく芝が敷かれ、その緑の草は イチイの木はとても小さく、とても分厚く、 とても短く、とても瑞々しく
That most like unto green wool wot I it was : The hegge also that yede in compass (‡=went round it) And closed in all the greene herbere With sicamour (§=honeysuckle) was set and eglatere.	緑の毛織物の中へと進んだ心地でそれは 生垣もまたぐるっと周りを囲み そして緑のあずまやすべてを囲い込み スイカズラが植えられユーラシアン・ローズも

And shapen was this herber roofe and all
As a pretty parlour : and also
The hegge as thicke as a castle wall,

またこのあずまやの屋根そしてすべての作りは
可愛い応接室のようで、さらに
生垣も城壁のように分厚くて

That who that list without to stonde or go
Though he would all day prien to and fro
He should not see if there were any wight within or no.”

立ち止まり、去ることを望まない者は
彼が一日中あちらこちら眺めようとも
見ることはないであろう、人影をどこにも



[図 3 - 3] あずまや 同写本より

Harl., 4425

人の目から遮断するという、あずまやの基本的な特徴と同じこのアイデアを、14世紀の詩「無慈悲な美しい婦人」“La Belle Dame Sans Merci” (*E.E. Text Society, Vol. IV.) に見ることができる。

(仮訳)

“And sett me down by-hynde a traile	そして私を手すりの後ろに座らせておくれ
Fulle of levis, to see, a grete mervaile,	いっぱい葉を見る、想像を絶する素晴らしさ
With grene wythyes y bounden wonderlye	緑の柳でもって見事に囲いを作り
<i>The leeves wore so thicke with-out faile</i>	その葉は完璧に分厚く設えられているので
That thorough-oute myghte no mann me espye.”	どうやっても誰も私を覗き見ることはできない

あずまやの周りの花は、「真珠」“*The Pearl*”という名の 14 世紀の詩に描かれている。

(仮訳)

“I entered in <i>that</i> erber grene	私は入っていく緑の庭園の中に
In augouste in a high seysoun	8月の季節の盛りに
* * *	* * *
Schadowed <i>this</i> worteȝ ful schyre (*=bright) and schene	この草に影を落とし、げに明るく、美しく
Gilofre (†=clove-pinks), gyngure (‡=tansy) & gromylyon (§=gromwell)	
	クロープピンク [オランダナデシコ] エゾヨモギギク、ムラサキ、
& pyonys powdered ay between.”	そしてシャクヤクが、一面に点々と輝き

どの庭園にも水を貯めておく池 cistern の類が設けられ、多くの場合、精巧な装飾が施された噴水が一つ真ん中に、あるいはどこか目立つ場所に置かれた。 58 ページの絵 [図 3 - 4] は当時の立派な庭園に普通に見られた噴水であり、それはレベッカの泉を象徴するためのもので、そのような噴水を描いた多くの特徴的な絵画は 15 世紀の写本に掲載されている (参照 B.M. 14. E. 2.f.77, &c.)

このような庭園に植えられた花の種類はそれほど多くなかったが、それらの限られた種類の花が植えられた数ときたら、それはおびただしいものであった。

(仮訳)

“Ther sprang the violete al newe,	そこにスミレがまったく新しく咲いて
And fresshe pervinke riche of hewe,	瑞々しいツルニチニチソウが見た目も豊かに
And floures yelowe, whyte and rede :	そして花は黄色、白、赤と咲き
Swich plentee grew ther never in mede.	同じ花がたくさんそこでは育ち、野原には絶対ない
Ful gay was al the ground, and queynt	まさに地上は喜びで満ち、そして巧みに
And poudred, as men had it peynt,	そして点々と一面に咲く花は、人が絵に描いたように
With many a fresh and sondry flour,	たくさんの瑞々しくまた様々な花で
That casten up a ful good savour.”	それは素晴らしい雰囲気一杯に投げかける

(¶ Chaucer, Romaunt of the Rose, L.1431)

(チョーサー パラ物語 L.1431)

ツルニチニチソウ periwinkle, or parwinke は広く愛好された。この植物は、庭園の日影の地面を覆って明るくするのに適しており、このため「地面の喜び」「Joy of the ground」なるそれにふさわしい名前がつけられた。

(仮訳)

“Parwynke is an erbe grene of colour

In tyme of May he beryth blo flour

* * *

Ye lef is thicke schinede and styf.

As is ye grene jwy leef.

Vnche brod and nerhand (*=nearly) rownde

Men calle it ye joy of grownde”

(† Medical MS., Stockholm. *Archæologia*, Vol.XXX) (医学写本、ストックホルム 考古学第 30 巻)

ツルニチニチソウは緑色した植物

5月の季節に青い花を咲かせる

その葉は分厚く輝きそしてピンと立っている

緑のアイビーの葉のように

幅 1 インチでほぼ丸い

人はそれをまさに地面の喜びと言う



[図 3 - 4] 噴水 英語写本 "SPECULUM"より 1450 年頃 B.M. 2838

昔のあるバラードの中で、一人の高貴な婦人が「優秀なツルニチニチソウ」「The parwenke of prowess」と呼ばれた。その当時ツルニチニチソウは優秀さの象徴として使われたが、こ

れはエリザベス朝時代のナデシコ類が「礼儀正しいナデシコそのもの」“The very pink of courtesy”として使われたのとまったく同じことである。

同じ庭園の中の黄色い花の中で、マリーゴールド [キンセンカ] marigold、あるいは昔の著者はゴールドと呼んだ花は目立つものと言えようか。[訳注]

(仮訳)

“Golde is bitter in savour.	マリーゴールドの味は苦い
Fayr and zelu is his flower	その花は美しく黄金色
Ye golde flour is good to seene.”	本当にマリーゴールドの花を見るのは楽しい

(*Medical MS., Stockholm. *Archæologia*, Vol.XXX) (医学写本、ストックホルム 考古学第 30 巻)

[訳注 : 一般に日本でマリーゴールドと呼ばれる植物は、アフリカン・マリーゴールド (キク科コウオウソウ属 *Tagetes erecta*)、フレンチ・マリーゴールドなどであり、中米原産で、和名はコウオウソウ。16 世紀にヨーロッパに園芸種として輸入されたとされており、ハーブではない。キンセンカ (ホンキンセンカ キク科キンセンカ属 *Calendula arvensis L.*) はこれらとは別属の植物でヨーロッパ原産。王立園芸協会 RHS でも、キンセンカは field marigold、キンセンカの仲間であるトウキンセン (キク科キンセンカ属 *Calendula officinalis L.*) は common marigold としている。したがって訳語としては単にマリーゴールド、和名表記として [キンセンカ] と付記した]

嫉妬とはこの花で飾られていること、とチョーサーにより描かれている。「嫉妬とは黄色いマリーゴールドの花輪を身にまとうこと」

スミレ [ニオイスミレ] Violets、それは先賢から学ぶところでは、「広く知られたハーブ」“herbs well cowth († = known)”である。スミレが栽培されたのは、その甘い香りによるだけでなくサラダ用のハーブとしてでもあり、「スミレの花」は生で、タマネギ、レタスと一緒に食用に供された。一種のブロース [肉と野菜などを煮込んだスープ] の材料として、スミレがフェネル、セイバリーとともに記載されている († *Form of Cury*)。また料理の付け合わせとしても使用された。「モナミ」“mon amy”というプディングの古いレシピでは、コックさんは「スミレの花を添えて出す」ようにと指示されている §。別の写本では、「スミレ」“violet”という料理のレシピもあり、そこには「スミレの花を用意しそれを茹で、プレスして小さくすり潰す」とある。そしてミルク、米の粉“floure of rys”、砂糖または蜂蜜と混ぜ合わせ、スミレで「色どり」をつける。料理されたのはスミレだけではなく、サンザシ、サクラソウ、さらにバラさえも同じ道をたどり、同じように取り扱われた。「赤いバラ」というあるレシピは、簡単に「同じやり方で卵の黄身と一緒に混ぜてそしてさらにスミレのように」“ Take the same saue a-lye it with the yolkys of eyroun and forther-more as vyolet”と書いてある。ローズ・ヒップ [野バラの赤く熟した実] も使用され、サラセン流ソース “ saue saracen”と呼ばれた特別の料理ではヒップが主な材料であった。このような花が

普通に料理され食べられていたと知ったからと言って、その美しさや詩情を膨らませることにはならなかった。

§ The following is the recipe of this excellent dish: - “ Take thick creme of cowe-mylke, and boyle hit over the fire and then take hit up and set hit on the side: - and then take swete cowe cruddeds and presse out the qway (*whey*), and bray hom in a mortar and cast hom into the same creme and boyle altogether - and put thereto sugre and saffron, and May butter - and take yolkes of eyren streyned, and betten, and in the settinge doune of the pot bete in the yolkes thereto, & stere it wel, & make the potage stondynge: and dresse five or seaven leches (*slices of bread*) in a dish, and plant with floures of violet and serve hit forthe. ”

(仮訳) この素晴らしい料理のレシピは次のとおりである。「牛乳の濃厚なクリームを用意し、火にかけて煮て次にそれを取り出し横に置く。次に甘い牛の凝乳 [チーズの原料] を用意し、乳漿を絞り出し、そしてすり鉢の中で磨り潰して、同じクリームの中に入れ戻して一緒に煮る - そしてそこに砂糖とサフラン、そして May バターを入れて - そして卵の黄身を別に取り出して、かき混ぜて、鍋を置いてそこに卵の黄身をかき混ぜて入れて、そしてよくかき混ぜる、そしてスープを準備して：次に 5 ないしは 7 切れのパンを皿に盛って、スマイレの花を飾りつけ、そしてテーブルに出す」

このようなショックな気分になったとしても、バラはやはりその愛らしさと香りで評価されるものだとわかると嬉しくなる。現代のバラ園が中世の庭園の所有者を驚かせることになろうとも、また様々な形や色があることが彼らを戸惑わせることになろうとも、彼らにとってバラと言えはあの甘い香り！、その本質的な特徴である甘い香りが現代のもっとも見事なバラのいくつかには欠けていることを知って残念に思うであろう。バラのほのかな香りほど、私たちの心に夏の夢をいつも思い起こさせるものはないし、多くの人々が、チョーサーの時代以来、詩人がバラ園に近づきながら感じた驚きと同じことを経験してきた。

(仮訳)

“The savour of the roses swote	バラの香りは甘く快い
Me smote right to the herte rote”	私を自然と赤い心へといざなう

あるいは、バラとユリの花冠が空気を香りで包む時

(仮訳)

“The swete smel, that in myn herte I find	甘い香りよ、私の心の中に私は見つける
Hath changed me al in another kind	私をまったく違う自分へと変えたことを

バラには、赤と白の二重咲きのバラ double roses、一重咲き single の赤白、そしてどこにもあるイヌバラ dog-rose、またスイート・ブライアー sweetbriar があった。これらは壁

に沿って植えられたり、一本ずつ庭園のここ、あそこ植えられたり、あずまやに這い上がったりしていた。赤の二重咲き (*Rosa Gallica* のいろいろな品種) はもっとも価値の高いもので、この赤バラは思い描くことのできるもっとも愛らしいものであるかのごとく思われたので、15世紀初期の「アヴェマリア」の中に歌われることになった。

(仮訳)

“Heil be thou, Marie, that art flour of alle As roose in eerbir so reed!”	聖なるマリアよ、花の中の花よ 庭のバラが真っ赤なように
(*Early Eng. Text Soc.)	(初期英語原本協会)

チョーサーは二重咲きのつぼみを愛でたが、それは一重咲きの花卉がすぐに散ってしまうのに比べ長持ちしたからだった。

(仮訳)

“I love wel sweitie roses rede : For brode roses, and open also Ben passed in a day or two ; But knoppes († =buds) wilen fresshe be Two days ate leest or three”	私はこよなく愛す、甘い香りの赤いバラを 大きなバラ、そして開いたものも 1日か2日で散ってしまった だが、つぼみは瑞々しいままであろう 最低でも2日か3日は
---	--

赤または白のバラが2つの対立する者同士の象徴になった時、庭園の所有者がどちらの側についたかは、その庭園の中でどちらの色の方が優勢であるかによったことには疑いが無い。「夏の日射しに映える、咲いたばかりの鮮やかな赤バラ」(† *Assembly of Flowers*. By Chaucer) か、それとも「瑞々しく褪せることのないイングランドの白バラか。根も茎も両者とも大いなる名誉である」(*Political poem, 1460-71年 - *Early Eng. Text Soc.*, Vol.IV.)。花輪や花冠を編む上で、バラはあらゆる花の中でもっとも一般的な花であった。

(仮訳)

“And on hire hed ful seemly for to see A rose gerlond fresh and wel smelling.”	そして彼女の頭には一杯にその場にふさわしいような バラの花冠が瑞々しくそして甘い香りを漂わせていた
(† <i>Knight's Tale</i>)	(騎士物語)
“And also on his head was sette Of roses redde a chapelette.”	そして彼の頭にも置かれていた 赤いバラの花冠が
(† <i>Romaunt of the Rose</i>)	(バラ物語)

ツルニチニチソウは、蔓に葉が伝っていくので花輪に適しており、多くのその他の花が使われた。エミリーは自分の庭園の中に「頭を飾る洗練された花冠を作るために様々な色の白や赤の花」を集めていた(§ 騎士物語 *Knight's Tale*)。しかしこれらの可愛い花冠は美しい乙女たちだけが身に着けたものではなかったことは、カンタベリー巡礼団の中の、と

ても好感の持てない召喚人 sompnour [教会裁判所の担当者] ですら「彼の頭に花冠を載せていた」ことからわかる。毎年、赤いバラを与えることは免役地代 “quit rent” [封建時代の賦役の代わりにの地代] の普通のやり方であり、クローブピンク [オランダナデシコ] the clove pink, or gilliflower の花や種^{||}が報酬としてしばしば使われた。ユリは庭園の中でバラに次いで重要な地位を占め、詩人の歌の中ではバラとどちらが多いかを張り合っていた[¶]。白いユリ [マドンナリリー] (*Lilium candidum*) は善良、純粹、あるいは美のすべてを象徴する役目を負わされていた。

(仮訳)

“First wol I you the name of Seinte Cecilie Expoune, as men may in hire storie see : It is to sayn in English, Heven’s lilie.”	最初に聖セシルの名をあなたに 説明してくれ、男どもは彼女の話からわかるかも それは英語では天国のユリと呼ぶもの
(** <i>The Second Noune’s Tale</i>)	(二人の修道女物語)

“That Emelie, that fairer was to seene Than is the lilie or hire stalke grene.”	ああエミリー、汝より美しきものがあるとすれば それは緑の茎の上に咲くユリ [訳注]
(† † <i>Knight’s Tale</i>)	(騎士物語)

[訳注 : Signet Classics 版 Than is the lily upon his stalke greene.による]

“Upon his hand he bore for his delyt An eagle tame, as any lily whyte.”	彼の手の上に乗せているのは彼の楽しみとする 飼いなされた鷲、白ユリのごとく
(† † <i>Ibid.</i>)	(同書)

|| Bicester 大修道院の収入の中には、リチャード 2 世の第 19 年、土地および家屋に対し “una rosa rubea recept’ di Henrico Bowols de Curtlyngton . . . et de uno g’no gariophili rec’ de Rog’o de Stodele ” . . . &c. - Dunkin, *Hist. of Bullington and Ploughley*. ほとんどの場合、チョウジ clove の種 = チョウジ香辛料の取引であった。

¶ 「ユリ」と「バラ」だけがノリッジ修道分院の庭師の文書に記載されている花である。

キショウブ yellow flag と紫色のアイリス purple iris はユリと同じようなものとして語られることがある。 古い医学の写本にすでに記載されているとおり、「庭で育つ」ユリはミルクのように白く、野原や森に咲くその他の 3 種類は「サフランのように」黄色で、もう 1 つは「青紫」と描かれている。ただし、これらはグラジオラス “gladdon”、アイリス “yrees” とともに記されている。ほかの花は野原や森から持ち込まれ、栽培される中で多分改良されたのであろう。 中世において花壇に咲いていたゼラニウム geranium はのフウロソウの一種である wild cranesbill、あるいは小さなハープロバート [ヒメフウロ] herb Robert であった。 マツムシソウの一種である wild scabious とケシ類 poppy は、現代の私たちの庭で言えば 1

年草・2年草のような目立つ存在であった。しかし、多くの在来種は立派な見栄えがするもので、キバナノクリンザクラ cowslips、スイセン daffodils、サクラソウ primrose、ジギタリス foxglove、マーレイン[モウズイカ] mullein、セイヨウオトギリソウ St.John's worts、リンドウ gentian、オキザリス oxalis、マロ [ゼニアオイ] mallow、ムギセンノウ corncockle、ヤロー[セイヨウノコギリソウ] yarrow、センノウ、マンテマなど champion、シマセンブリ centaury、スイカズラ honeysuckle などよく知られた植物が育てられていた。また庭の一角にはシャクヤク peony や背の高いタチアオイ hollyhock、トリカブト monkshood flowered の花が咲き、日影の隅にはつやつやした葉のシダの一種のコタニワタリ hartstongue が生い茂り、細長い花壇の一部はナデシコ類 pinks、セイヨウオダマキ columbines で明るく彩られ、あるいはラベンダー、ローズマリー、タイムの甘い香りが漂っていた。チョーサーの時代の庭園の花を描写するにあたっては、チョーサーがこう言ったことを忘れてはならない。

(仮訳)

“The daysie or elles the eye of day	デイジーかそうでなければ太陽か
The emperise and flour of floures all.”	女帝であり花の中の花

デイジー daisies は最高に手入れされた庭園の中でこそ輝いていた。よく手入れされた芝生と木陰のあずまやはデイジーで「点々と飾られた」“powdered”。ここでチョーサーを再び引用すると

(仮訳)

“Home to my house full swiftly I me sped	我が家へ私の家へ私は大急ぎで飛んで帰る
To gone to rest, and early for to rise	休むために下がり、そして起きるにはまだ早い
To seene this floure to sprede, as I devise	この花が広がるのを見ることを考えたりしながら
And in a little herber that I have	そして小さなあずまや、それは私の持ち物、そこに
That benched was on turves fresh y grave	ベンチが芝生の上に設けられ、瑞々しく厳かな芝生よ
I bad me shoulde me my couche make.”	私は自分で私の休み場所を作らねば

デイジーはまるでベルベットのような芝生を損なうと考えられるが、私たちの庭からそれが消えることはなかったようで、この小さな花を愛でる詩人と思いを同じくするのである。「デイジーは何と甘いことよ」「Si douce est la Marguerite.”

チョーサーが描いた庭園は、理想化されたものとは言え、当時の庭園の様子を、詩人の目を通して、忠実に描写していたことは間違いない。緑の枝で一杯の庭園をエミリーが歩いている時、その姿が幽閉されている騎士により見られたが、その庭園は、多くの封建時代の城壁の下に見られたものと同じようなものであったであろう。



[図 3 - 5] 庭園 パラ物語のフランダース写本より 15 世紀後半 HARL. 4425

(仮訳)

“The grete tour, that was so thikke and strong

Which of the castel was the cheef dungeon

* * *

Was evene joynant to the gardyn wal.”

その大きな塔は、分厚く強靱で

その塔が城の中心であった

* * *

それは庭園の壁にまでつながっていた

この空想上の庭園に対するものとして、歴史上の實在の庭園がウィンザー城の庭園である。スコットランドのジェームズ 1 世 [在位 1406 ~ 37 年] がそこに幽閉されていた時、その慰み

に書いた詩が残されているが、それは彼の牢獄から眼下に広がる庭園のとても魅力的な描写となっている。

(仮訳)

“Now was there made, fast by the Towris wall さあ、ここに造られたのは、高い壁で守られた
A garden fair; - and in the corner set 美しい庭園；そしてそのコーナーには
An arbour green, with wandis long and small 緑のあずまや、それは長い木、短い木の
Railed about, and so with trees set 柵で囲まれ、そしてそこには樹木が植えられ
Was all the place, and Hawthorne hedges knet すべての場所に作られ、サンザシの生垣が組まれ
That lyf was none walking there forbye そこには誰一人通り過ぎるものはなく
That might within scarce any wight espy. 稀には不思議なものを見出すこともあろう

“So thick the boughs and the leaves green 大きな枝が豊かに広がり葉は緑に輝き
Beshaded all the alleys that there were, そこにあるすべての小径に陰を落とす、
And mids of every arbour might be seen そして各あずまやの真ん中に見えるであろう
Growing so fair with branches here and there, かくも美しく育てて ここあそこに枝は広がり、
That as it seemed to a lyf without, それは人ひとりいないように
The boughs spread the arbour all about. 大きな枝はあずまや全体に広がり

“And on the smalle greene twistis sat そして小さな緑の曲がり角の上に座るのは
The little sweet nightingale, and sung 小さなかわいいナイチンゲール、そして歌う
So loud and clear, the hymnis consecrate こんなにも大きく澄んだ声で、神に捧げる賛美歌
Of loris use, now soft, now lowd, among, 神の教えを説くため、時にやさしく、時に大きく
That all the gardens and the wallis rung すべての庭園と壁は鳴り響き
Right of their song.” かれらのさえずりによって